



神田茂記念賞を拝受して

関 勉



ホウキ星を追っかけて、とうとう 29 年の歳月を重ねてしまった。

私が初めて出逢ったホウキ星は、1948 年の日食彗星だった。それは 1948 年 11 月中旬だったと思う。私はラジオのニュースで、暁の空に肉眼的な大彗星が出ているということを聞いて、彗星に興味を持ち、あり合せのレンズを組合せて粗末な天体望遠鏡を作った。今思えば、その天体望遠鏡が、その後何回となく作った comet シーカーの第 1 号機であった。

日食彗星 (1948 XI) はとうとう見ることが出来なかったが、早暁、冷たい夜露にうたれながら新しいホウキ星を追う精神は、ずっと今日まで持ち続けた来た。

1940~1950 年代は倉敷天文台の本田実氏や、チェコスロバキヤの A. ムルコスが盛んに新彗星の発見に活躍されていた。しかし、彗星の発見法に関する文献は非常に少く、搜索のための優秀な星図 (ベクパルのスカルナテ・プレソ 1950 はまだ発売されていなかった) も揃っておらず、いわば暗中摸索のような状態だった。そうした状況の下において、1 冊のノルトン星図を頼りに、15 cm 反射鏡で捕えた星団や星雲をチェックし、自分で星図を作っていくといった努力が続いた。

私の 1950 年~1960 年までの、20 才台の若い頃には全く発見には恵まれなかった。しかしその間、山本一清先生や神田茂先生の御指導を頂き、観測に励んだ。特に日本天文研究会の神田先生は、私に彗星のスケッチや、目測法による位置観測をすすめて下さり、私の観測から、軌道を決定したり、或は位置推算表を改良されたことも度々あった。帰郷が期待されているネウイミン第 2 彗星やテイラー彗星は、先生が摂動を計算され、私たちが熱心に搜索したなつかしい彗星である。この 2 つの彗星は今もって行方が知れないのだが、15 cm 鏡で捜した 20 年昔を思出しながら、私は今芸西観測所の 40 cm 反射鏡を向け、じっとその光跡を追っているのである。

1961 年 10 月、待望の 1961 f (Comet Seki) を発見した。口径 9 cm の comet シーカーによる発見であったが、光度 7 等という明るさでありながら、他に全く独立発見者はいなかった。翌年 2 月、関一 Lines 彗星を発見したが、国内で同時発見が多くなったのは、1965 年の池谷・関彗星以



後のことである。

彗星の位置観測はリングマイクロメーターも使ったが、主として 1960 年代の終り頃までスケッチによる概観測を行った。それは星表が全く素人には入手できなかったからである。しかし 1969 年頃、SAO 星表が入手でき、同時に 15 cm 反射鏡を赤道儀にマウンティングして、彗星の写真観測を始めた。そのため 1968 年の第 2 池谷・関彗星は何とか自分で撮影し観測することが出来た。この彗星は、1968 年暮に発見され、翌 69 年 3 月頃まで見えたのである。

一方、高知市の光害は年ごとに激しくなった。今、訪れた人に、高知市の自宅の屋上で、15 等星まで撮影したといったら、誰しも驚くだろう。1973 年には、高知市から東 40 km の芸西村の山の中に観測所を移した。ここでは Nikon の 12 cm 双眼鏡で搜索を行うと共に、40 cm 反射鏡による写真観測を行っている。移転早々 1973 年 9 月、折から接近中のコホーテク彗星 1973 f をキャッチした。翌 1974 年 7 月にはフィンレー彗星 (1974 d) を検出することが出来た。しかし、念願の新彗星は、この芸西ではまだ発見していない。観測所の距離が遠くなったので、それまでのように自由に観測することが出来なくなったのである。他に職業をもちながらの仕事であるから、観測の時間は従来の 1/3 以下に制限を受けるようになった。しかし星の美くしさは無類である。黄道光はもちろん、対日照を発見して、その明るさに驚くほどの恵まれた環境である。

私のこれからの目的は、やはり新しい彗星を発見すること。そして良い彗星の位置観測を残すことである。待望の AGK-3 星表もドイツから入手できたので、今回の受賞を機に、心機一転して、質の良い観測を残したい。そして永く観測を続けて、貢献したいと思っている。

